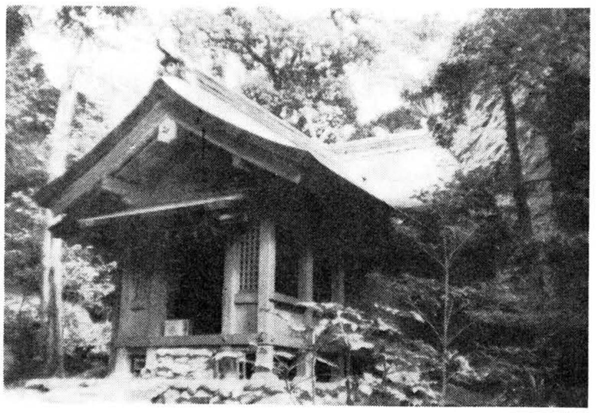
宗像

毎月一日発行
定価 一年 送料共500円
発行所
宗像大社
福岡県宗像郡玄海町
電話 神湊 26番

宗像大社御用達
神輿
祭具
装束
松島神輿製作所
京都市下京区北小路通新町西入
電話 (37) 八八六九番
振替口座京都一五八九一番

沖津宮御屋根替成る

樹間に輝く黄金の千木



宗像大社沖津宮の神殿は昭和七年以来三十余星霜を経て可成りの損傷をみており、これが御修復の事は数年来の懸案であった。今年になってからこの問題がいよいよ具体化し、実施することに決定したのであった。すでにここ二三年一部篤信者の浄財が寄せられていた。

去る九月十六日、業者と共に渡島調査した宇都宮祢宜の報告によれば、神殿の損傷箇所は主として御屋根で、深山の靈岩の蔭に御鎮座する関係上、長年の間の濕気と木の葉等の堆積によって桧皮の腐朽が甚だしいとのことであった。

当日久保宮司以下が奉仕して仮御遷座祭が斎行された。（本紙十月号参照）

十月十六日、材料が運搬され、工事が始められた。海上遥かに、然も波涛きびしい沖ノ島に材料を運搬するために大島漁協の全面的な協力が得られた。神職も人夫も一緒に荷物を揚陸運搬した。胸つき坂の参道石段を喘ぎ喘ぎ登るのは並大抵ではなかった。

工事は順調に進んだ。御殿の位置する山中には、工事関係者以外一人もいない。閑寂な千古の靈蹟に毎日槌音がこだました。

御屋根の葺替えは、将来を顧慮して銅板葺きに改めた。飾り金物も新調され、ほの暗い岩蔭のその箇所が、丁度天の岩戸の開いたように明るく輝いた。

工事は余程の悪天候でない限り休むことなく続けられた。予定はどんどん進捗した。

工事人は五人であったが、工事以外の雑念は何も起らぬ条件なので、倍以上の能率が上った。悪天候の日には岸辺で魚釣りをした。これが翌朝の日供祭の神饌ともなり、又皆の食糧ともなった。

十一月十六日、最後の仕上げ監督のために神職が渡島した。そして、仕上げと後仕末に数日を要した。

十一月二十日、さらに二名の神職が渡島した。大島より海上四十九粁の玄海は、天気の晴朗なるには似ず大うねりの波涛であった。途中、漁船の人等が秋刀魚を餌にして引き釣りをした。サワラを混ぜて六尾の大鰤が掛かった。

正午沖ノ島着。早速御遷座祭を斎行した。新装成った本殿と拝殿の御屋根が折りからの木洩れ陽に輝いて一際荘厳に拝された。祭典には沖ノ島出漁仲間の全員約三十名と、灯台の職員、漁港工事の県の職員、工事現場の代表らが参列した。特に沖ノ島出漁仲間の人等の献魚は大鰤七尾（うち一尾は先程の引き釣りの分）、アンバコと称する魚などがあり、これらは神饌案には載せ切れず、拝殿の床上に紙を敷いて並べるという壮観さであった。

祝詞の中には遷座の由を申し上げたほかに、特に辞別きて参列者らの安全繁栄が祈念された。

祭典終了後、こんなめでたい機会は滅多にないといって、全員が記念撮影をした。銅板の光が「おかなぐら」の内壁に反射して御殿の周囲が明るい。何となしに御神慮のほどが拝される様なただずまいであった。

昭和七年以来三十二年ぶりで沖津宮の御屋根が修復された。絶海の孤島の山中に壮厳無比の神殿がおわしますことを胸に、帰路の船上で遠ざかる神島を振りかえる一同の感激は尽きないものがあった。

尚、正遷座奉祝大祭は来る昭和四十年五月二十七日の「沖津宮現地大祭」の際に合わせて斎行することになっている。

沖津宮の神宝をはじめとする文化財を収蔵するために、宗像大社宝物館が完成した折りも折り、宝物の根元たる沖津宮神殿が田島の宝物館完成と同時に修復されたことは、奇しきめぐり合わせでもあった。

工事関係者
大工　川崎貞治、藤田富士雄
銅板張り　小山工務店
（小山源一郎、中迫孝一
国安頼満）
人夫　高島基、辻野日出男、
金替守茂、遠藤八光

宝物館開館のおしらせ

当社宝物館が完成した。去る一月二十日、東京国立博物館より神宝が送り込まれた。

十一月二十九日、関係者と功労者を招待して落成開館式、十二月一日と、三日から十日迄の間に寄附者招待を行い、一般のためには来る元旦より公開することに決定した。

文化財保護と信仰の活性

文化財保護法によって国家的民族的立場から極めて貴重な遺品が安全に保存され、適宜の修復の手が加えられて管理されるようになったことは、まことに有難いことである。個人的の家宝や、公的な機関の蔵宝と、その所蔵者の事情は異っても、古くから大切に伝えられて来たものは少なくないが、一般の教育程度が高まるにつれて、古文化財に対する理解が深められ、これが保護に関する関心が強くなったことも喜ばしい。法令による、国家的保護の裏付けと、所蔵者管理者の自覚が相伴なって、文化財の保存管理に必要な施設が漸次完備してゆくことは、一国の文化水準を示すものでもあり、史学的文化的の意義も大きいと言わねばならない。

一概に文化財と云っても、その意義も亦種々の特色を有っている。国家民族の興亡に関する大事件につながる物から、単に一時代の風俗の片鱗を窺わせる工芸品まであって、骨董的価値は別として文化財的価値にも自ら軽重はある。然しその保護の処置はいずれも等差なく、萬全な方途が講ぜらるべきであろう。

文化財の保護は我が国ばかりでなく、文化的水準の比較的高い国々はいずれもこれが保存管理に多額の公費を支弁している現状である。唯物史観を政治理念とする赤色革命の国家に於ても、その嫌悪する王政時期の遺品であっても、これを大切に保護しようとする国家的処置も見られるのである。

文化財の中には宗教に関連あるものが非常に多い。つまり信仰上の所産であり、伝承であるものが今日全国の社寺に見る文化財である。信仰の対象となるもの、若しくは信仰に因縁あるもの、これを単に文化財保護の立場からのみ処理してよいか否か、ここに問題がある。吾人の深い反省と細かい配慮を求めるものもここにある。

時代の古さに関係なく、信仰上の発願から製作され、或いは社寺に献納され、その時代に信仰面にのみ意義のあったものを、単に保存管理の目的だけで取扱ってよいものか。製作者も献納者も後世の文化財たることを意識してはいなかったと、考えられる。国宝重要文化財のレッテルを求めて遺したものでもあるまい。

或る時代に宗教的靈場となり、今日宗教的生命を失って単に遺跡となっているもの、或いは信仰的活性が時代と共に滅びて単なる遺物となっているものは、文化財保護の立場から保存管理にのみ手を加えてよいかも知れないが、現代尚信仰の対象として活性を現実に持続しているものに就いては、保護のために信仰が無視されるようなことがあってはならない。信仰の生命は文化財以前の生きた力であり、人間の精神生活に極めて大切なものである。文化財保護の名のもとに、現実に生きている信仰的活性を殺してはならないのである。これは所蔵者たる社寺自身は勿論、関係当局や、関連ある機関もよほど強い考慮が望ましい。

この種の文化財を擁する社寺当事者の無反省な処置は、往々新聞紙上に伝えられて識者の顰蹙を買い、学問的興味からのみ或いは経済的事由からのみの浅薄な態度は、真摯な信仰者の嘆声を招いている。信仰の活性が持つ精神的意義は文化財たる物的特殊性に優先する。

先年宗像の某寺院が信仰の対象として現に衆庶の参拝している不動明王像を、文化財保存施設に収容する当局の方針を拒否したことは、当然の主張であって、国宝とか、重要文化財の指定は保護の有利な点はあっても、一方に信仰の活性を無視し、その生命を死滅せしめる危険なしとしない。指定が毒薬となる場合を大いに警戒しなければならないのである。

宗像大社沖ノ島に伝わった多数の社宝が、国宝若しくは重要文化財に決定して新装の収蔵庫に納まることになったが、一部学者の間にこれを沖の島祭祀遺跡の出土品と名づけているのは誤りである。現在尚神島として沖ツ宮として祭祀は厳修されている。信仰は脈々として生きている。これらの社宝を単に考古学的立場から、遺跡と呼び、遺品と称するは、新旧の年代を超越した精神生活の本義を没却した謬論である。

沖ノ島の自然林の天然記念物指定の場合も信仰的活性を没却する点が指摘される。この島の植物を保護して、枯死せしめたり、他へ搬出したりすることを禁ずるのはよいが、現に信仰対象の神島として献木を申出る者の信仰心が、現状変更を許さぬ法規によって阻まれているのである。島自体もその島に伝わる信仰も天然記念物のために出来たのでもなく、発生伝承されたのでもない。信仰者にとって、又祭祀に与る者にとっては、甚だ不可解であり、迷惑な指定でもある。保護のゆき過ぎと言うべきか。

×　×　×

阿蒙少言

早朝バスの中「朝から坊主に会うとは縁起でもない」と非行老年の放言「縁起が悪ければサッサと死ぬがよい」と枯木禅僧のお返し。何が縁起がよいか悪いか何も知らずに生きているのに、否からくも生かされているのに。どうぞ御遠慮なく天国へ、そこは血圧の心配など一切無用 ○人生の最大不幸は貧と病いだと言う「四百四病より貧ほど辛いものはない」と古い芝居の台詞は貧乏を不幸の最上位にあげているが、若い時は貧乏した方がよい。多くの慾望がたやすく満たされては、人間的向上もなく、よい仕事もやれなくなる。病も持っている方がよいか、一病息災、自己制禦は病が警しめる。いづれにせよ不幸は人生の良き教師たることがある ○天は二物を与えずと、金があれば身体が弱い、身体が強ければ頭が悪い、思うにまかせぬ世の中と嘆くが天の誤算もある。境遇に恵まれ、美しい奥さんと出来の良い子供と揃った家庭がある。天は二物を与える ○五輪景気にあふられた鍋繃の秋、次は素寒貧の冬。子供は子供なりに懐工合が苦しくなり、度々家族会議に小使銭のベアを提訴する。資本蛟の搾取相手はおやぢの痩脛だが、交渉相手は専ら太った母親である。母とは辛くて甘い女なり ○あらゆる女性の中で、最も安心して喧嘩の出来る相手は母親である。女性の涙と微笑は意外な効力を発揮して、国を傾けたり、忠士を滅した例も少なくない。蟻の一穴まさに千丈の堤を危くする。女性相手の紛争は禁物、母なる場合のみ喧嘩もよろしい ○「あした待たるるその宝船」討入りの日が迫ってきた「隣は何をする人ぞ」試験が近づいてきたサインコサインの声がする。

（白雲）

第四十四回 宗像大社献詠歌会詠草

十一月一日　於社務所詠草到着順

神湊　隣船　俊
書きをへて心おちつき窓ぎはに日向ぼっこや赤トンボ君

勝浦　永島　桂翁
遠く来し孫がものせる楽書に思ひをよせて独りほゝえむ

宮田　片山　一
みづみづと青草つづく川堤に綱を限りて山羊は喰みをり

村山田　吉田佐市郎
気遣ひし風ものがれて穂垂れよく稔る稲田は黄金波うつ

福岡　高橋　昇
逞しき五輪女軍のあの脚よ我孫の母に欲しやと思ふ

京都　鈴木日出年
ふるさとの秋を流るゝ雲かきし画に向ひゐて一日うまずも

東郷　吉田　信夫
海山ゆ天翔りせし聖き火は歓呼あびつゝわが前をゆく

戸畑　田中ハッセ
ほの白き聖火かかげし女子走者不動の顔にて一瞬に去る

香椎　織田　椽雨
かしこくもみたまのふゆの嬉しさになほ生きなむと歳をわすれて
（祈願祭を拝受して）

飯塚　萩本　夕照
さし昇る朝日背にうけ広前に合掌をせし人ら動かず

宮司　新海　邦男
日没に塒にかへる小鳥群野球遊びで夢中の子らは

津屋崎　麦野　時雄
はてしなく豊年の稲穂ひろごりてとりいれを待つ村村の家

大濠　江崎　琴子
千代かけてまさきくませと祈るかな米寿むかへし師を仰ぎつゝ

山口　篠田　俊樹
椎買うて子にそこはかとなく人の真の姿を教へんとする

宮田　片山　朔子
蚕飼ふ家のありてか山峡の車窓につゞく桑畑鮮し

東郷　藤田　信子
グアム島の野の花そへて十九体の遺骨を荼毘にふす火やあはれ

香椎　桜井　秀
しかすがに男の子なれ精巧の玩具よりなほ竹の棒ふる

〃　桜井　ツ子
土に還る寂けさみせて雑草は原一ぱいの秋陽を吸へり

戸畑　伊規須ゆき
午前四時月の没りたる窓暗く醒めて読みつぐ読みさしの書

吉留　山下しづえ
感激に胸弾ませて韓国もオリンピック賛ふる夜の放送で

福岡　林　まつえ
雲海の中に浮かべる阿蘇五岳さながら島の如くただよふ

勝浦　永島　計七
聖火消え青き目の客去りしあとテレビ見る目もさびしゆく秋

筑邦　津留崎初子
ひた走るアベベ選手の印象がひときは深くオリンピック終る

東郷　有吉　春子
雑踏を逃れて暫し山峡の湯壷に浸りぬ姉と妹我れ

田島　小野　迪夫
四年前仰ぎし月を仰ぐなりこころ弱きをわれと奮まし

コロラド　浦野　薫
コスモスにたはむれ遊ぶ白き蝶吾がさ庭辺に秋はしのび来

吉留　白木うめの
一隅に残りしすゝきの風にゆれ拓かれし岡の粗き赤土

東郷　小野角次郎
ハイヤーで釣川下る田島様今日は晴着の土手つづきかな

〃　小野　花居
冷気泌み田島の宮居おごそかに闇夜を一きは人のざわめき

村山田　金丸　柳蔵
自転車のペダルを踏みて村行けば近くに木犀の花の咲くらし

吉田　占部　由久
拾ひ来し一本の苗ねもごろに植えたるコスモス花盛りなり

吉留　高山徳七郎
人の持つ力の限り競ひ合ふオリンピックの美しの祭り

内浦　長畑　房江
ほのぼのと窓白む時目覚むる癖けさも金星の大き輝き

福間　中村　吾郎
岩壁に匍ふ蔦の葉を震はせて絶え間なし滝のしぶき吹きつく

門司　永島　哲夫
石蕗の花咲きてをり病む友に秋の深さを見せむとて祈る

武丸　立石　昇
オリンピックバレー勝利の瞬間に東洋の魔女ら抱き合ふさま
（テレビ）

宗像談話室

生徒と共に

若いG先生が今の中学校に赴任して来てから丸三年になる。来た当座は何かにつけて驚くようなことばかりであった。広々と、思う存分の空間を占めた学校の敷地、東側には郡境いの山脈が連なっている。北側は千米も行けば玄海の白浪で、それは学校の小丘からでも眺められた。西側と南側はすぐに学校敷地に隣接してはてしない田園が開けている。

何と美しい環境であろう。G先生はこれ迄の都会生活に較べてみて こんなにも違う所があるものかと思った。こんな学校でのんびりと教鞭をとることができるとは何たる倖せであるか。G先生の胸は将来への希望と期待でふくらんだ。ところが実際は違っていた。G先生は初めての授業のために登校した日に驚いた。そして横っ面を猛烈にひっぱたかれたような衝撃を受けたのであった。

四月の新学期、早春の風は冷たい。しかるに、学校の教室の窓ガラスがあちこち割れていた。教室の壁も穴だらけ、落書だらけであった。そう古い校舎でもないのにひどい状態である。明らかに人為的に破壊されている。

授業の時に又驚いた。先生の受持ちは二年生であったが、誰も満足に授業を受ける態度になっていない。殆んどが帽子を、それもだらしなくかぶったまま、机の上に腰をかけて誰彼となく大声で話をしている。先生がいようがいまいが構わないといった風景であった。

先生の胸にぐっと来るものがあった。しかし先生はこらえた。そして教壇を降りると片っ端から「帽子を脱ぎたまえ、椅子に坐りなさい。一緒に勉強しよう」と一人一人を直した。犯し難い教師の威厳があったのであろう。生徒らが沈黙した。

先生は余計なことを決して云わないことにした。姿形は心の在り方の表現でなければならぬ、知らぬ者には教えてやり、且つ、うまず、たゆまず躾けるようにしなければならぬ、というのが先生の信念であった。一部の同僚が笑った。

「G先生、先生のようにやったって今の子供らは云うことを聞きませんよ。」

その同僚は組合活動の理論斗争家であった。理想を述べる時は滔々として尽きる所を知らぬかの如き男であったが、教育の場の実際家ではなかった。G先生はこの時もぐっと来たがこらえた。今はこんな粗末な教師が多い、しかし俺は違うぞ、現在に最善を尽すことの出来ない者が将来の理想を述べたって何になるものか。G先生は黙々と「生徒の躾」を実行し続けた。生徒らがだらしない態度を全くひそめるのには半年以上もかかった。今ではG先生の授業の時にふしだらな言動をする生徒はいなくなった。

この中学校には花壇が一つも無かった。優柔不断な校長に「花壇を作らして下さい。」と相談したら「君、予算が無いよ」と断わられてしまった。G先生は生徒に相談した。そして漸くささやかな花壇を作った。が、これは間もなく他の組の生徒らに踏みにじられてしまった。同僚が云った。

「G先生、だから云わないことじゃないでしょう。無駄ですよ、そんなこと」

しかしG先生は挫けなかった。ますます斗志をかき立てた。近頃は勉強の出来ない子の家庭に出かけて、補修の面倒を見てやるようにしている。非行生徒が出た時には一緒に警察に行って心からその非をさとすようにしている。勉強も掃除も、すべて生徒と共にやるようにしている。

G先生は希望を持っている。それは、埼玉県深谷中学のように、この学校でも各教室毎に日の丸の旗をかかげるようにならないものだろうか、ということである。その為には自分は一部の同僚のように単なる教育労働者になり下ってはいけない。たとえ彼等が嘲笑しようとも、自分が生徒のためにどれだけのことをしてやれるか、極力努力しようと秘かに思うのであった。

宗像大社 十二月祭

一日　月次祭　午前十時

一五日　古式祭　午前六時　実質的な新嘗祭ともいうべき行事で、祭典後清明殿に於て古式による「お座」が開かれる。祭典の神饌は古式による特殊神饌（菱餅、九年母、ゲバサモ）等が捧げられる。氏子会が主体となってお座券を配布する。早朝人々は参々伍々参拝をし、新莚に座って忌穂の刺し立てられた御飯を栗の箸でいただく、神に新穀をお供えして人も共にいただくという神人相嘗の厳粛な行事で、当社では建治元年（一二七五）の社記以来約八百年の伝統をもつわが国最古の「お座」の一つである。単なる商売繁昌や縁起かつぎに傾いておらない古来の姿である点が全国にも誇り得るものといえよう。

一五日　鎮火祭　午前十時　郡内消防関係者が参集して「火しづめのまつり」を行う。実際に拝殿で古来からの儀式が行われる。

三一日　大祓式　午後五時　一年の後半期の終りにあたり、しらずしらずの間に犯した罪や穢れをお祓いし、過ぐる一年間の反省を行う行事。又、郡内外から集められた数万の人形―ひとがた、個人の姓名をかいて息をふきかけたもの―がお祓いされる。これによって来るべき新年を清々しく迎えるわけである。

三一日　除夜祭　午前六時　すぎし一年を送るにあたり、静かに来しかたをふりかえり来るべき新年をおごそかに迎えるために、心を鎮めて大きくは国家の繁栄のこと、世界の平和のことを祈る。みずからも沈思黙考するのによい機会である。

交通安全祈願が続々………

――ダンプ、生コン車等も――

交通安全の御神徳を以って全国に知られている当社は、最近境内の駐車場が狭隘になって来た為、その対策を検討している。これは車の激増に伴って、安全祈願お祓いの方も急増して、土曜、日曜祝祭日には境内外まで車が溢れ出す時があるので、駐車場拡大が考えられており、目下、正月祭等には宝物館脇の用地が使用される予定である。

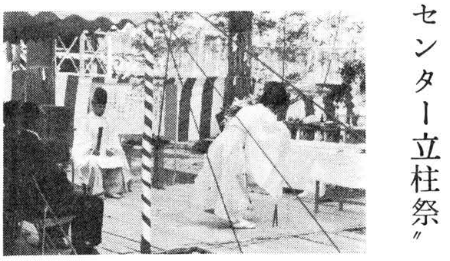
祈願車の種類も豊富になつて、トラクター、農作機械からダンプ、生コン車、それも八トン、十トンと云うマンモスカーがお祓いを受けている。

乗用車の五、六倍の車がゴウゴウと地響きを立てて神前に止まると大きな楼門が小さく見える。

又、事故を起こしてから参拝される車も少くなく、自分の非を改めて真剣に参拝して晴々した心持ちで帰って行かれる。

この気持をいつまでも持ち続けて欲しいものである

〃福岡交通センター立柱祭〃



九州の主都である福岡市は人口約七二万を有し、九州における政治、経済、文化、交通の中心地である。この福岡市の表玄関であり、西日本随一の偉容を誇る新博多駅前に既報の通り福岡交通センターが建設される事になり「間組」の手に依って完成を急いでいる。この立柱祭が、宗像大社の司祭により十一月二十日、無事に斎行された。

この福岡交通センターの事業の概要を述べると、新博多駅の枢要の地、約一、六〇〇坪にわたる地下一階、地上七階の近代ビルを建設し、一、二階を全国初めての立体バスターミナルとして延べ約四、〇〇〇回に及ぶ市内、郊外および遠距離のバス発着の拠点とされるという。

このセンターの完成によって、福岡市は勿論一般公衆の利便に大きな役割をはたしてくれることであろう。一日も早くセンターの完成される日を待つ。

社務日誌抄

十一月一日　月次祭斎行。引続いて神湊災害復興祈願祭を斎行役場、消防団等関係者が参列した。献詠歌会社務所。

二日　西鉄赤間駅前信号機点灯式、小野権宮司、本多出仕出向宮城野部屋一行必勝祈願祭。

三日　明治節祭午前十時斎行

五日　出光興産福岡支店社員来社。

七日　昭和鋼機宝物館正面扉修理。

八日　NHK村上記者及び刀鍛治森園素有他一名来社。

一〇日　神社庁宗像支部会へ職員二名出席。

一一日　清水建設伊藤課長、日高工務店社長宝物館現場点検の為来社。井筒屋宣伝課来社。

一五日　月次祭斎行。宇都宮祢宜沖津宮御屋根替工事監督の為最終便で出向。

一六日　出光興産福岡支店長来社。

一七日　朝日新聞記者宝物館取材の為来社。

一八日　日本経済新聞記者来社

二〇日　小野権宮司、楠本権祢宜沖津宮御屋根替遷座祭奉仕の為渡島無事奉仕して夕刻帰社。沖津宮神宝東京博物館より到着搬入整理始まる。西鉄交通センター立柱祭、斎藤権祢宜升谷権祢宜奉仕。

二三日　赤間駅前泉水祭太田権祢宜奉仕。宝物館庭並道路砂利敷の為田島部落総代十名奉仕。

二四日　大神神社小方祢宜、出光興産是久庶務課長来社。

二六日　出光興産社長引率の欧州美術館長等ホボケン夫人外十三名参拝・宝物館拝観。

〃心の泉〃誕生

――宗像大社心字池に因んで――

国鉄鹿児島本線赤間駅前にささやかな噴水がお目見えした。これは全駅が、管内の無事故を目指して努力した結果、今迄達成が難しかった無事故三千点に到達する事が出来た。

この貴い体験を何かしるしとして残したいと云う駅職員の願いから、駅前の美化の一端に、又毎日通勤する乗客の心をなごませる様なものはと衆議一決して、駅前に庭と噴水が造られる事になった。

この計画を聞いた城山採石社長を始め、地元赤間の人々が資材を提供、駅職員とその家族が努力して噴水と庭水が出来上った。

去る十一月二十三日、当社職員の司祭によって泉水祭が行われた。

駅長の言に依れば、赤間駅は宗像大社の玄関にあたり、宗像大社の神苑の池は心の字に形どって造られた心字池がある。この池も誠心の結果達成出来た無事故を今後も持ち続けたい意味もあって、池の形を心の字に型取った。そして名称も心の池としたと云う事であった。

宗像大社御用　綜合印刷
有限会社 大和印刷所
宗像郡宗像町東郷　電話東郷27番

宗像四郎氏貞（三十一）

山下半可 作
福田長庵 画

重矩の最後（二）

その年も間もなく暮れた。晴賢には杉重矩が臭い、と思われた。彼は家来を派して内偵させた。

その間も旧主家と殉難者の遺族をどしどし摘発して処断した。これは遠慮仮借のないものであった。中には乳呑子をその母諸共に処刑したといわれる。一つには自家保全の為、一つには陶家に叛する者を警めて民心に徹底させる為の方策手段であった。謀叛を起した者が謀叛を恐れる。という妙な話であった。

そんな春先の或る日、近臣の寺内治部丞が晴賢を訪れた。興奮している。

「殿、この様なものが手に入りましてござりまする」

「何じゃ」

「かねがね殿の御見通しのごとく、杉どのは武任を操っていた様で――」

「うむ、何ぞ見つかったか」

「はい、これを御覧下さりまする様」

主従は挨拶も抜きにして用談に入った。治部は懐に手を入れると一通の書面を取り出した。取る手ももどかしく読み下していた晴賢の額に見る見る青筋が立った。

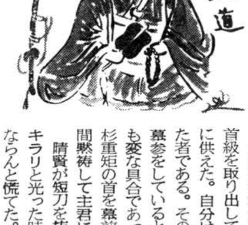
「治部、これは相良武任の申し状ではないか、何処で手に入れたるぞ」

「はっ、杉与運どのの屋敷を捜索させましたる処、出で来りましたる由にて」

「うーむ、与運はこれを仕末する暇も無く飛び出したという訳であったか」

去る八月二十八日、大内の危急の際に杉与運は取るものも取りあえず馳け付けたのであった。治部はその空屋敷を家来と共に捜し廻った結果、この〃相良武任申し状〃を手に入れたのである。武任が以前に杉与運に捕えられた時に「神明に誓って」提出した〃申し状〃は、与運の手から主君の義隆に差し出され、それがもとになって武任は釈放されたのであった。この申し状によって陶逆心をその当時主唱した者は、杉重矩であったことがこれで始めてはっきりした。そういえば晴賢が疑念を懐いた件、すなわち大内家滅亡の舞台に杉重矩が全然顔を見せなかったことも今にして合点が行くことであった。

陶をして家中の抗争に追い込み、遂に主家を滅亡させる破目に立ち到らせた黒幕は、実に杉重矩であった。当時、杉重矩は「武任が貴殿のことを御主君に対して悪しざまに云いふらしている。御用心なさるがよい」と陶に申し送って寄越した。何という策謀であったろうか。



「治部！直ちに重矩が首級をあげい。余はそれをしるしに亡き殿にお詫びをせずば済まぬ。げに恐るべきは人の腹のうちじゃ。そしらぬ態にして責任を逃れようとする者ほど腹のうちは黒いものよ」

治部、直ちに、と指令してから晴賢は近習を呼んだ。大寧寺詣での指図の為であった。

翌日、晴賢は治部が討ち取って来た杉重矩の首級を見、それを首桶に塩漬けにして長州深川の大寧寺に向った。

重矩は此の度の事件については自分が焚きつけ役であったのにも拘わらず、傍観の態度をとっていた。まさか「武任申し状」があって、そこから尻が割れることは考えてもいなかったからである。優柔不断な主君を犠牲にした重矩は今度の事件に依って何の得る処もなかった。自分の蒔いた種は、とんだところで自分を枯らすことになってしまった訳である。事件の後逼塞して形勢を窺っていた彼に突然に陶の手の者が襲いかかったのであった。

杉重矩が陶によって処分されたことは、世間に何の同情も呼ばなかった。世間では重矩の去就については薄々知っていたのであったろう。

晴賢は大寧寺に着くと、重矩の首級を取り出して大内義隆の墓前に供えた。自分は確に謀叛を犯した者である。その自分が今ここに墓参をしているということは何とも変な具合であった。彼は佞臣杉重矩の首を墓前に供えると長い間黙祷して主君に詫びた。

晴賢が短刀を抜き放ち、それがキラリと光った時に家来共は何事ならんと慌てた。晴賢は素早く自分の髷を切ったのである。

その髷を更に墓前に捧げると再び長い間黙祷し、それから彼は家来の方を向いてこういった。

「余はここに、君臣の仲を顚まらしめた杉重矩の首級を御主君に供え申した。なれど尚この心は癒えぬ。よって今日より入道して志のいちぶを現わしたいと思う。よいな者共」

これを聞いた家臣たちが単純に感激した。特に同行した大内晴英の衝動は大きかった。

この辺に晴賢の政治的配慮が実行されたということも知らず、一行は同夜大寧寺に一泊し、一夜の読経供養ののち翌日山口に帰った。

（つづく）

宗像誌をめぐる一年間

昭和三十九年―辰年―釈名に曰う、辰は伸で万物みな伸び出ずる時なりと、この吉祥に歩を合せるべく吾が宗像誌も社報としての完璧を期したつもりである。

今この年に別れを告ぐる時顧りみて惜別の情をなつかしみ、明日の努力の糧としたい。

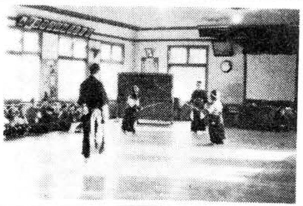
一月、元旦は終日雨であった。しかし悪天候にもひるまず続々釣川土堤を大社へと進む初詣での車は「いやもうお宮から国道までずっと自動車が続いて綺麗でしたよ、数えたら一〇分間に二〇〇台の車が境内へと吸いこまれました」と言う職員の驚きの声となった。

二月、正月の雑踏が静まり「福は内鬼は外」と和やかな声が聞える頃本誌は大社剣道部寒稽古の勇ましさを伝え論説も「少年と共に」と邦家の運命を背負う明日の世代への期待を述べ現今社会の重要問題になっている青少年の育成についての大社の所信を表明した。

三月、若草萌え出ずる頃、昨年より初められた献上わかめ採集の記事取材のため編集子は大島へ赴いた。うららかな陽光に静まる大島港の写真が第一面を飾り読者に春近しとほのぼのとした思いを抱かせたことと思う。

四月、年度初めに当り本誌は三十九年度予算三二〇〇万円の発表及び事業の解説を行い健全なる発展を遂げつつある大社の運営を誇った。又この号より常陸丸事件六〇周年を記念して編集部共同調査による「ああ常陸丸」の連載を始めた、この一文が世論の喚起を呼び須知中佐以下百余柱の忠烈を永えに顕彰出来れば喜びこれに過ぐるものはない。

初詣での車


剣道寒げいこ

献上わかめ包装

五月、鯉のぼり空に泳ぐ時、威勢のよい記事が紙面を賑した。「宝物館本館落成引渡し式」、陸上自衛隊による「宝物館敷地埋立工事始まる」この記事が掲載されるや反響すこぶる多く、読者の方々より「開館は何日か」と問い合せが殺倒し係を驚かせた。次に此の回をもって昨年から一〇回にわたって掲載された出光佐三氏の「企業に於ける人つくり」が終了した。世界には物の世界と人の世界があると説き起し日本青年に課せられた世界的使命で完るこの論稿は読む人に深い感銘を抱かせたであろう。

子供の日のお参り

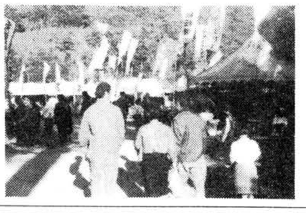
宝物館本館完成

六月、梅雨は毎年、五月祭の無事終了を告げる記事と共に明けて行く、この時「昭和三十九年度奨学生決る」「奨学生からの便り」を読まれた方は大社のささやかな事業が如何に真摯な学徒を勇気づけているかを知り心頼しく思われたであろう。亦これに呼応するかの様に郷土が生んだ偉材「倉田主税の半生記」の連載を初めた事は年少有為の人材育成の為に甚だ意義ある事と言えよう。

七月、日射しが強くなり青海原に想いを駆する時「沖津宮現地大祭斎行さる」「沖津島防人日記」が掲載された。昨年、一昨年と天候不順の為、渡海参拝が叶わなかったから喜びは一入である。この月、この二編を合せ読まれた方は古来よりの沖島祭祀の重要性を再認識され崇敬の念を一層強くされた事と思う。

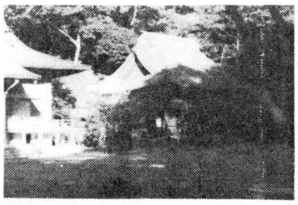
風景（大島港）

放生会浦安舞


秋まつり社頭

八月、夕立の激しい時、本誌と因縁浅からぬ出光萬兵衛翁の追憶の記事を書いた。温容眼前に浮び記し得なかった故人の多くの業績のあった事をお詫し御冥福をお祈りする。明るい記事としては「当社奨学生がミス日本」に選ばれた事である。第一回奨学生松井尚子さんがミス日本に選ばれ若い職員が「宗像名物美人とタマゴ」とつぶやきながら社報の写真を食いいるように見つめていた。

九月、残暑にもめげず社内は「みあれ祭、放生会大祭」の準備に突入、本誌は「今年のみあれ祭計画について」といち早く報導し放生会大祭と直結したみあれ祭の意義を読者に報道した。この秋の大祭に間に合う様にと正門大鳥居の建て直しが行われたのもこの為である。少し傾斜をした大鳥居が万一参拝者に危険があってはとの配慮から行われたこの工事に文字通り昼夜を分たぬ突貫工事となり九月十日無事完成した。


風景（秋の鎮国寺）

十月、なしも柿も放生会が無事終了した十月二十八日夕刻神湊の旅館から発した炎は折からの強風に煽られ、みるみる中に三十二軒を全焼した。郡内未曽有の大火となった為に、大社では浄財を義捐金として送り、復興祈願祭を斎行し、物心両面より出来るかぎりの援助をした。

十一月、紅葉に染まった境内を歩きながら、紺碧の空に「はためく御長手」の写真をみて言いつくし得ない感激を再び噛みしめた。神郡宗像の祈りの結集がこの写真一葉に巧くまずして表現されている。十月は世紀の祭典オリンピックに終止した。しかし歓楽つきると次は哀情と論説「花火の次に上るもの」はオリンピックの熱風に浮かれ上った世間に警告を発している。

十二月、義士本懐の月に待望の宝物館開館式が挙行された。想えば昭和三十七年本誌に設立計画書を報じてこの方二年有余日、宗像原頭に屹立する宝物館の偉容に接する時、関係者の感慨如何ばかりのものがあろうかと察せられる。時あたかも小説「宗像四郎氏貞」は、愈々佳境に入った、中興の祖氏貞公を今日に出現せしめば彼何を為すや!!

ともあれ年は過ぎ行く、人は今年より来年をより良き年としたいと念ずる。社報宗像も来る年には「与える社報より求められる社報へ」と一段の前進を遂げたい。

便り

先日は献詠歌会に列席させていただきまして楽しい一日を過ごさせていただき、有難うございました。

御立派なお方ばかりで嬉しい反面に、面映ゆい気持ちで過ごしてしまいましたが、今後共末席にでも加えていただき、勉強させていただき度く存じます。

東郷　藤田信子

「十一月、上洛禅行中の神湊の隣船禅師（田代宗俊氏）から京都御苑内の宗像神社参拝記が寄せられた。皇居御守護の同社に額づいた老禅師の感慨が詩歌によく現わされている」

（編輯部）

御苑宗像神社参拝

宗像大宮氏子
隣船宗俊　敬草

行尽街頭御苑道
晩秋風色洛陽空
森々歩々崇華表
守護皇居宗像宮

天孫臨降幾年年
神勅社頭宗像辺
霊木楷根種三粒
皇居聖苑献宮前

楷の実を献じ申候
（宗像大社辺津宮の神木楷の実を京都迄持参したこと。）

○晩秋や錦を残す洛陽の皇居御守護宗像宮

町村往来

◇消防車入魂式…4日午前10時半、福間町役場。百三十馬力、購入費百九十九万円、大和町分団に配置。福間町のポンプ車はこれで計四台になる。

◇津屋崎町野球大会…3日十六チームが県立水産高、津屋崎中の二グラウンドで熱戦を展開、同町土居チームが優勝した。同町公民館主催。

◇玄海町地区青少年育成委員会結成、青少年非行防止のため、これまでの部落単位組織の上部組織として結成

◇福間町青年団の料理講習…15日午前9時半、町公民館、家政クラブ員約十五人が参加。

◇県道勝浦・宗像線改修工事の完工式…17日午前11時、津屋崎町奴山公民館前。宗像町用山から峠を経由、奴山まで千六百五十メートルの道幅を拡張した。この工事には10月6日から自衛隊第一〇八施設部隊の三十六人が派遣され、ブルドーザーなど十余台で約四十日間の突貫工事をしてきた。40年度には引きつづき、奴山から海岸線道路までの工事をし、待望の宗像・津屋崎両町横断道路の全線開通となる。

◇津屋崎町青年団家庭クラブ定例会…17日午後8時、青年研究所。終わって生け花の練習があった。

◇宗像町有線放送の第二期工事…第一期工事で二千百加入者分を取り付けたあと、現在すでに二百五十件の申し込みを受け付けている。この第二期工事は、電線など原材料の全国的不足がたたっておくれているが、早ければ本月末には施工、おそくとも年内に完成させる。

◇津屋崎町浜の町敬老会…22日午前四時半大神会長宅。同地区のおとしより二十四人を招き、山脇教育長の講話のあと婦人会員が踊りや歌で慰めた。

◇中央中土俵開き…23日午前9時、同中学校庭。岩風ら五人の力士が来校披露。

◇運転手さんを表彰…宗像署はこのほど宗像町赤間駅前宗像タクシー運転手、天野義人さん（三五）を表彰した。天野さんは10月23日、旅館の女中さんが同タクシー付近でノミで首を刺されたのを目撃、犯人の特徴を覚えていて近くの派出所へ届け出、派出所の巡査をタクシーに乗せて犯人を追跡、逮捕した。

◇郡少年補導委員連絡協議会の視察…19日午前9時。筑紫郡大野町と福岡市東住吉中を視察。大野町は町内補導委員の活動、東住吉中は校内外の補導で実績をあげている。

◇郡小、中PTA理事会…21日午前10時半、教育庁宗像出張所二階。PTA成人教育計画、40年度予算などを話し合う。

◇吉武小交通教室…26日午前9時。吉武小グラウンド。宗像署、西鉄バス赤間営業所がタイアップして①バスの乗り降り②非常の場合の降り方③バスの停車距離などを実演、指導する。

◇無料人権相談所…26日午前10時、赤間区公民館。人権についての諸問題、家庭生活、借家、新族関係、その他なんでも相談に応ずる。（西日本新聞より）

新築完成
―玄海の味・生魚料理―
みなと荘
宗像郡玄海町神湊
電話　神湊　五六番

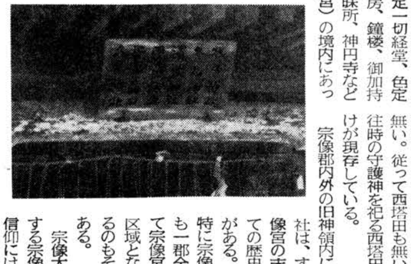
宗像伝説　其の四十五

西塔田神社

元和三年（一六一七年）に出来た宗像記追考（力丸与八郎氏蔵）に載っている田島社頭古絵図は、天正六年（一五七八年）の宗像神社造営図である。この図は弘治三年（一五五七年）に社殿設備が炎上する以前の古式を窺う上に、最も貴重な典拠となるものである。

そのかみの宗像神社の境内には社殿堂宇などが立ち並んでいた。中世は神仏習合の風があったため、社殿諸施設の間を縫って堂塔坊舎が点在し、社僧による奉仕の場とされた。宝塔院、東塔、西塔、弥勒寺、弥勒坊、西経坊、唐本一切経堂、色定一切経堂、色定座主支堂、護摩堂、鐘楼、御加持屋、僧座、六三昧所、神円寺などが第一宮（辺津宮）の境内にあったことが知られている。このことは、第一宮が宗像三宮の中でも、特に大宮あるいは惣社の名を以て呼ばれた所以であるといえよう。

さて右の諸施設のうち「西塔」は社蔵の「応安神事次第」にも明記されており、東塔、弥勒寺と共に九重塔の形をなしていた。極彩色の九重塔が三塔立ち並んでいた様子は想像するだに美しい。しかし天正の造営に於ては、殿舎は本殿拝殿のほかは御供屋、参籠所、猿楽舞台だけ、堂宇は経堂、鐘楼、阿弥陀堂などがわずかに再興せられ、往昔の盛観は求むべくもなかった。



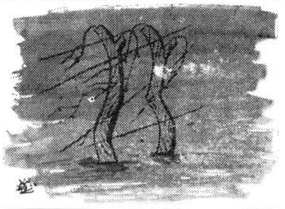
大化改新以来、戦国の末期の天正十四年迄宗像一郡は宗像神社の神領であった。その為、神領の中には社内設備の維持費を供出する為の土地田畑があった。「西塔田」は西塔を維持修繕するためのものであろう。そしてこの西塔田を守護する神社として「西塔田神社」が鎮祭されたものと思われる。場所は現在の福間町大字上西郷タイトン田の所にあたる。西塔田神社のことは、宗像大菩薩御縁起（鎌倉時代）によれば、宗像百八社の一つとして「西塔田若宮」と見え、正平年中行事（吉野朝）には七十五社の一つとして「西塔田若宮社」とあり、同神事の条には、「西塔田若宮社、正月朔日神事、三月三日節供神事、五月五日神事、九月九日神事、二季彼岸神事二度、毎月朔幣・望祭神事一年中四度」とある。延宝末社帳には「西塔田若宮、稚宮神尊」とあり、筑前国続風土記拾遺十八には、上西郷村の大森神社（旧村社）の内に祀る白山権現を当社であるとして記載がある。太宰管内志にも同様の記載がある。

天正年間以降、当社には西塔は無い。従って西塔田も無い。ただ往時の守護神を祀る西塔田神社だけが現存している。

宗像郡内外の旧神領内に祭る神社は、すべて宗像宮の末社としての歴史的由緒がある。旧神領特に宗像郡が一郡全部を以て宗像宮の氏子区域となっているのもその為である。

宗像大社に対する宗像郡民の信仰には特別なものがある。今でも秋の放生会大祭には「足腰の立つ者は皆参れ、一年参らねば三年参られぬ」と云って、一年御無沙汰すると爾後三年間は思わぬ不都合によって参拝出来ぬ、と警しめている。

さて、田島の辺津宮本殿を取巻く形で境内社として末社が祀られている。前述の郡内外旧神領の末社は此所に境内社としてお祭りされている。大よそ一社殿に六社が合祀されており、歴史で名な「七十五社百八神」が今も神殿の中に祀られている。このうちの第十九社にあたる神殿の中に「西塔田神社」の名が見える。今は西塔田神社といっても殆ど知る人も無い。曽ての大社の栄光を物語るかの様に、ひっそりと冬の陽を浴びている。今、降島途上にある社頭と思い合わせる時、感慨深いものがある。（H）



宗像大社献詠 俳句作品集（廿六）

津屋崎　井浦　良介
魚減る沖へ冬日に脇艪きしませて

白石百合蔵
聖苑の砂利踏み黄落はげしくす

西住喜三郎
風寒し神馬小暗き小屋に老い

勝田　光一
冬薔薇君射る一語欲しかりき

岩見佳代子
オリンピック終る鈴なりの柿映えて

安部真佐子
書きかけの文書き足してサルビア燃ゆ

毛利　夜潮
散る銀杏止まむ札売所はさびし

久羽　文王
つた紅葉凡写曼茶羅磨崖仏

占部　河童
戸が騒ぐ夜の蚕家に時雨来るか

田中　哲二
分別のうしろ手組めば枯れすゝむ

吉野　享志
帰寮後の郵便受けや秋曇り

香立喜一郎
「ち」の看板に菊捨てられし選挙戦

日立と共に五十年

倉田主税会長の半生記（七）

十六、七才の多感な少年とは違って、乃木将軍の死に素朴な感激はなかったろうが、深刻な思いが去来したことは想像に難くない。少なくとも、当時一部の人士が批判した如く、将軍の死を以て〃無意味の死〃となし、或は更に〃野蛮なる軽挙〃と断ずることはなかった筈だ。彼が身を以て示した、醇乎として醇なる至誠は、何人と雖もこれを汚すことは許されないのだ。まことに彼の死は単なる感情や、片々なる感傷によるものではなく、陸軍将校としての責任感に基づき、過去に於て果すべきであった責任を、天皇の崩御を待って実行したものであり、これは一切の批判を許さぬ崇高な事実なのである。彼の死が、壮烈なる自己遺責の精神の発揮であったことに明治の日本人の殆んどの人が、ひとしく襟を正して敬仰したのである。大正期の日本人も又同じであった。日本人が日本人たること、自信を失うこと、今日の如く甚しきを見るにつけ、切実にこのことが思い起こされるのである。

主税が仙台高等工業学校を卒業したのが明治四十五年の三月で、その年の七月末に大正と改元された。即ち彼は明治時代に生まれ、育ち、教育を受けた完全な〃明治人〃である。明治期の最后のスレスレのところで、こんどは一個の社会人として日本の産業会に飛び込んで行ったのである。彼がこれからの生涯を託そうとする日立製作所も、また明治期の終り近くに至って漸く本格的に発足をしようとしていたのである。両者は期せずしてほぼ同じときにスタートして、一方人間としては成長向上の道を辿り、他方は企業として発展興隆のコースを進んだのである。従って以下記述する倉田主税の人生コースは、反面において日立製作所の発展の歴史であり、換言すれば日立製作所の発展の諸相の中に主税自身の姿が或は現われ、時には消え、次第に前面に大きく表象されて来るのである。

ここでしばらく筆を日立製作所の創立者故小平浪平翁の上に転じてみたい。小平浪平は栃木県下都賀郡家中村大字合戦場というところで明治七年に生まれた。第一高等学校を経て東京帝国大学工科大学電気学科を卒業した彼は、久原房之助の知遇を得て、その世話で藤田組小坂鉱山に電気主任技術者として入社した。この会社で彼は止滝発電所をつくったが、設計から完成まで一切彼自らの手になったもので、電気技術者としてすでに一流の腕前を持っていた。間もなく彼は小坂鉱山を辞めて広島の水力電気会社に勤めたが、更に転じて東京電灯に入社した。我が国の電気事業が日清戦争後の国運発展に伴い急速度に伸びた時代なので、技術者はひっぱり凧の有様であった。三十三才の時、再び久原房之助に招請されて彼の経営する日立鉱山に転じたが、その動機は、久原の好意に対する所謂〃士は己れを知る者の為に死す〃という、儒教的教養に基づく感激の外に、自分の理想を実現しようとする一大決意があったのである。彼の理想とは即ち、「我が国の電気事業はすべて外国製の機械、器具が使われているが真に自国の電気事業を盛んにしようとするならば、先ず機械類を自分達の手によって生産しなければならない。そうしなければ電気の技術の向上は出来ないし従って事業の発展は望み得ない」ということであった。

その頃、我が国には国産の電気機器は殆ど見るべきものがなく、すべて外国からの輸入に依存していた。そして、ただ単に機械を輸入するばかりでなく、それらの機械については、それぞれの会社から技師とか職工長とかいった技術関係者がやって来て、日本人を使いながら据えつけの仕事をしていたのだ。勿論、彼等は日本人の何倍かの高い給料を取っていたが、我が国の諸会社はそれを支払うことを当然と心得ていたのである。外国の機械を買い、外国人から教えられて技術を勉強するのは極めて安易な方法である。然し、それを続けているのでは永久に先進国の後塵を拝する外はない〃というのが小平の意見であった。だからこそ、彼は久原の懇請を幸いに日立鉱山に入り、電気部門の責任者になって自己の所信に一歩一歩進んで行く決意をしたのである。小平は、こうして久原房之助経営の日立鉱山に入り、工作課長として電気部門を担当することになったが、はからずもこれが、後年に〃世界の日立〃と言われる至った今日の日立製作所の誕生につながるのである。然し、彼を課長に戴く工作課というのは、言ってみれば鉱山で使っている機械類の故障をなおす修理工場に過ぎなかった。鉱山本来の仕事から見れば、まことに存在価値の乏しい、面白味のない部門で、久原自身も修理工場としての必要性は十二分に知りながら、ややもすれば軽く見る傾きが無くはなかった。然し、小平としては〃機械生産〃の大目標に一歩を踏み入れたことで、大いに満足し、張り切って毎日の仕事に取り組んだことは言う迄もない。工作課修理工場が、みすぼらしい掘立小屋ながら精錬所の構内に独立してつくられたのは明治四十一年の暮のことだ。それ迄は鉱山の諸工場を転々と移らされ、片隅で細々と仕事を続けるという状態だった。十数人の部下を督励しながら小平の毎日は眼の回るような忙がしさであった。東京電灯の次席技師、送電課長だったことを思うとまるで町工場の親父に転落したようなものである。然し、小平はそのことを敢て意に介さなかった。たとえ、今はそうでもやがて自分の夢が実現して、電機機械の製作工場をつくって見せるという希望が、しっかりと彼の心を支えていたのだ。彼は只管、汗にまみれて働いた。その頃、日立鉱山は旭日昇天の勢いで発展していた。従って幹部ばかりでなく鉱夫に至る迄〃ケチケチするな〃という気分が溢れていた。だから機械の使い方も乱暴きわまるもので、毀れることなど一向気にしなかった。増産増産でハッパをかける一方だから電動機は忽ち焼けてしまう。後から後から持ちこまれる修理品で、小平の部下達は連日の残業はまだしも、徹夜仕事をすることも珍らしくなかった。当時、鉱山で使用していた電動機は、殆どアメリカ製のものであったが、新らしく買ったものが、ものの一年も使わないうちに黒焦げに焼けてしまう有様であった。だから、始めは修理だった仕事が、次第に新品を作るのと同じようなことになったのである。いやでも応でも完全なものにしなければならないのであるから、知らず識らずのうちに職工達の腕は上がっていった。明治四十一年には始めて五キロの柱上変圧器の中味を作ることに成功した。翌年には五十キロのものも作られた。その年の七月には東京帝国大学生の工学士高尾直三郎が、先輩小平の良き協力者となる覚悟で新らしく入社した。彼は後に日立製作所の副社長となった。新鋭技術者を迎えて小平の希望は一段と実現の方向に向かったが、それ以前に小平は自分の手で五馬力の誘導電動機三台を作り、大いに自信を深めていた。この五馬力電動機は小平が作った最初の回転機であり、その成功により彼は本格的な電機製作所設立に踏み切る決意を固めたのである。自ら電動機製作の成功に自信を深めたところに、良き協力者を得たので小平は勇気百倍した。そして大胆きわまる計画を立てた。

（以下次号）

文責　養父　守

懐古日本海々戦

武下一郎

樟の老樹森おいしげる奥がにて鎮座まします宗像大社
あやめ咲く池の神橋明るくて楼門入れば広き内苑
人の影まれなる神苑ひとり来て久にあくかれし社前に額づく
お神楽の太鼓の音がとうとうとこの神域のしじま破るも
神の湊に満船飾の舟つどひどよもしにつつ神幸迎ふ
沖の島よ姉姫大島よ中の姫この辺つ宮に神集います

極東の海上権を握った国が戦勝国だとされておった日露の戦であった。全露国の運命を背負い、前年十月バルチック海を船出して七カ月の長年月と四万五千海里という難航を続け、多くの苦難を越えて明日か明後日か目的のウラジオストックに入港し、日本海軍を打ち滅ぼして満州の日本兵を袋の鼠として最後の勝利を目指して来た大艦隊がこの萬里の大海に唯一筋の逃げ路も切り開くことが出来ず全滅して、東郷元帥の名と共に日本海軍の功績が全世界に驚嘆され、日露戦争に終止符を打ったのである。

東郷大将が天祐と神助に感謝された事は萬民の知る処である。

この大戦中、最も重要な、勝敗を決した激戦三時間は沖ノ島の二、三海里の西北海上で戦われたのである。

この戦況報告が三十分後には佐世保鎮守府を経て大本営に着き、手にとる如く戦況が知られ大きな功績であったと時の軍令部長加藤寛治大将が箱崎従の海戦記念式の講演で語られた。

名実共に沖ノ島は日本海大海戦の古戦場であると思います。三十年ばかり前沖津宮参拝者がこの話に共鳴され五十銭也の寄贈をされ、基金としている。

私はこの古蹟に何等記念すべきものの一つだにないのを残念に思っています。これらのことを思い浮べると声も出なくなり涙が頬に伝わります。

今日の日本の健在もこの戦に深いく関係のあることを長く伝えたいと熱願しています。

以上が佐藤市五郎氏の講演筆録の全部である。個人の立場から述べているが、現存する実見者としては唯一の貴重な記録であり、今尚実感の惻々として迫るのを覚える。さらに佐藤氏の悲願が末尾に語られているのも感慨深いものがある。彼の生存中に実現することを祈るや切なるものがある。

あゝ常陸丸（七）

さてその後、陸軍は中将三好成行が北鮮司令官として朝鮮を圧して露領に迫り、一方海軍中将原口兼済の率いる樺太征討軍は北遣隊司令長官少将片岡七郎と共に七月露国守備兵を降し、八月三十日全島を占領した。

日露戦役の大勝によって我が国は実に刮目すべき飛躍的発展を遂げ、完全に世界の列強に互するに至った。極東に於ては盟主的地位を占め、世界問題さえも日本を措いてこれを論ずることができない程になった。

明治三十八年、朝鮮の宗主権を握り明治四十三年八月二十九日には日韓合併を見たのである。大戦後の国威宣揚にともなって、日本国民が国家エネルギーの自覚と自信を持ったのもこの時から始まる

以後、世界各国は平和勢力（軍事勢力）の均衡上日本と相提携する風潮さえも見られるに至り、わが世界外交も桧舞台をほしいまゝにするに至ったのである。

二、常陸丸の遭難

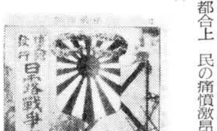
日露開戦となるや浦塩の敵艦隊は屢々我が近海に出没して、我が軍の輸送を妨害していた。満州軍の編成は早急に完結せねばならない。兵員の輸送は焦眉の問題であった。

明治三十七年の二月五日、派遣隊は神戸、宇品、佐世保、門司、下関の各港から続々と送り出された。

第一軍の輸送は戦況の有利なるを見越して仝月十日第十二師団を韓国の仁川に上陸することから開始した。

第二軍の輸送は船舶数の都合上これを二回に分けて逐次韓国西岸に上陸せしめた。

独立第十師団の輸送は、これも輸送船数の都合でこれを三回に分け、兵員は第一回三隻、第二、三回は二三隻を以て神戸、宇品より乗船の上輸送を開始した。



常陸丸もこの輸送縦列に属していた。その頃我が近海に出没していた敵の浦塩艦隊ロシヤ、クロムボイ、リュウリック号は六月十五日、突如筑前沖ノ島附近に現われ、折からこの航路を僚船五艘と共に航行中の常陸丸、佐渡丸はたまたま戦地より要務を果して帰る日の丸、金沢丸等七艘の輸送船と相会し交叉せんとする時に敵の雷撃を受けてそのまゝ撃沈させられた。

この報一たび国内に伝わるや国民の痛憤激昂はその極に達した。

（一頁よりつゞく）

吉武　立石ろせの
自然石の高き石段のぼり来て深山の真清水手にうけてのむ
（英彦山にて）

田島　白雲　山人
追悼詞あはれ誘はず針ほどを棒と賞めたるへつらひありて

江口　辻野　開造
ひたむきに玉にいどみし貝塚のほまれは高し大和撫子

勝浦浜　永島　文子
鎌揮ればあたり散り敷くはぜ紅葉風をも染めて降れる一瞬

多礼　藤崎保五郎
胃ガンとは知らでよろこび手を振りて見舞し我を友は送りぬ

深田　中野　節子
新道の建設のトロッコ長々と過ぎ施肥過多に倒れし稲あり

東郷　藤崎　辰子
今朝のテレビの或る漁業組合長の顔が記憶の中の父に似てゐし

福間　尾郷　須恵
高原に摘みし秋草の一握り流れに浸し行きし人あり

吉武　原田　松代
落葉しく柿の木蔭に葉鶏頭は赤く目立ちぬ秋の深みて

吉武　原田　リノ
出雲路の旅のもくろみたてしより元気を出して友らも働く

朝町　井上陽之助
かばかりのことをなしても腰いたしとりたくないもの齢なるかな

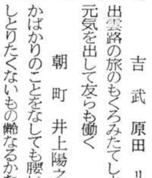
宮田　北原きみ子
おのずから続けるリンゴ畑に来てもぎしリンゴに陽のぬくみあり

原町　中村　幸
あけびやると我が幼名を呼ばれしはこの岡なりき整地されたり

戸畑　山磨　昌子
秋日和山手を過るバスの屋根まぶしく光りて曲り行きたり

門司　永島　まち
舉火もゆ展望台を窓により一人ながめて思ふかずかず

福間　瓜生　朝恵
菊日和嫁ぎゆく娘の幸を祈りて神に夫とひれふす



我楽苦多告知板

○休日、K君子守りを妻君から仰せつけられる。ゴロゴロしたいK君四才の伜T君に向い「おまえ隣のS嬢と遊べ」と命令。T君隣におもむき五才のS嬢と遊ぶうち、見ていたテレビのラブシーンの解釈で意見が衝突、では実演と云う事に相成り、両君ややにらみ合って顔をくっつけ様とした時、S嬢「あんた、鼻が汚い！」と指さした、とたんにT君両腕でゴシゴシと鼻をふいて本番となったと云う。それを垣間見ていたK君「チエッ、伜め、うまくやってやがる」

○一年の計は元旦にあり。元旦の計は十二月にあり、諸士よ急いで年賀状を書き給え、そして無理をして借金を返してはいけません。

占いコーナー

本月の運勢

（十二月八日〜一月五日）

☆一白水星の人
（明24、32、42、大7、昭2、11、20年生）
人の力に叶わぬことこそ神仏はお助け下さる。心身多忙、この忙しい時思い切り神のおかげを戴き、働くこと、古い関係、古い問題の再燃不快な事有り、かかわるな、皮膚病に注意

☆二黒土星の人
（明23、32、41大6、15、昭10、19年生）
今月は営業発展気分爽快、形ある悦び襲来の月目上の人のため多忙の事あり、大智活眼をもってはき行動すべし、言葉、酒、女に心せよ、怪我に注意

☆三碧木星の人
（明22、31、40、大5、14、昭9、18年生）
先月来滞り事も有無相通じ、整理され、希望事も発展の月 人の言葉を重んじ無理せずに気を軽く持ち、成行きを見定め、おだやかに処して財福有り

☆四緑木星の人
（明21、30、39、大4、13、昭8、17年生）
情難、又は重圧になやむ事有り、玄海の涛の如く機をつかみ、さっと退く事肝要の月、運気順調集積の作用有れば不自由なし、難苦悩の人は過去に悪い方角に移転新増改築をした人。火の元特に注意

☆五黄土星の人
（明20、29、38、大3、12、昭7、16年生）
新方針、家の改増築思いたつ月作用有り、新規の事に無闇に進まぬが賢明なり、婦人、目上の世話事有り見込事調う、自己の力を知り、自己を生かすは吾なりと自覚せよ自ら事を破るな。

☆六白金星の人
（明19、28、37、大2、11、昭6、15年生）
金運月なり小心は凶、細心しかも大胆に信念を生かし、表裏なき活動をせよ金運の喜びある反面出費も多い、新しき方針事、交際も開く。慾を出さず心静めて選べば吉。

☆七赤金星の人
（明18、27、36、大1、10、昭5、14年生）
大いに勇敢に進め、利益を得る道につながる財福あり。安心事、頭脳をつかう事有り、若い男のすすめ、うまい話にのるな自らの舌禍早合点、神経痛に注意。

☆八白土星の人
（明17、26、35、44大9、昭4、13年生）
迷い事あり、右か左か決断して踏み切る問題あり、見透し通り段々気を引き立て進むべし、財福あり早き事皆よろし。安泰活動月旅行中の盗難、落し物、風邪引に注意厄月なれば病難に心せよ持病の人再発注意。

☆九紫火星の人
（明16、25、34、43、大8、昭3、12年生）
特に胃腸病。遠方の人使用人より喜び事持ち込まれる。積極的に慾張らず冷静に活動すること和敬の心第一、胃腸注意